

橋沼 新



国民体育大会
カヌー sprint 競技
男子カヤックシングル2000m 3位
同5000m 6位

1 目標は、東京五輪への出場。夢は五輪の金メダル。国体3位で満足していません」と言い切る。

カヌー sprint 競技は10月7日から10日まで、盛岡市の御所湖広域公園漕艇場で開かれ、橋沼は男子カヤックシングル2000mで3位、同5000mで6位に入賞した。インターハイの2000m3位に続き、国内主要大会の表彰台に登った。

国体の目標は、2000mと5000mの「2冠」。高校トップクラスのロケットスタートに磨きをかけ、課題であった後半の落ち込みは、有酸素トレーニングで鍛え上げるなど、目標に向けて準備は整っていた。

5000mは順当に勝ち進んだが、なかなか調子が上がらない。決勝ではパドルを1m長いものに変えた。1m伸びると感覚は全く別ものになるが、優勝のため「かけ」に出た。

決 勝はロケットスタートが決まり、得意の先攻逃げ切りの型に持ち込んだ。しかし、1000mを超えてから、ライバルたちが猛追。橋沼は「となりが前に出たので、こぎのピッチを上げました」と、後半粘りを見せたが6位でフィニッシュ。

「目標は達成できなかったけど、全て出し切れました」と5000mを振り返った。

2000mに向けて工藤大將監督は「2000mは誰にも渡すな。それだけの力がお前にはある。優勝してこいとげきを飛ばした。」

2 000m予選は、順当に突破し準決勝へ。準決勝は、橋沼を含めた国内屈指のsprinter 4人が同組に。決勝進出は3人と厳しい勝負と予想されたが、レースが始まると、橋沼は不安を吹き飛ばす。日本代表の縄空選手（山形県谷地高）と息も付かせぬマッチレースを展開。結果は2位だったが、決勝に向けて大きく弾みをつけた。

迎えた決勝。風と波があるものの、ここまで来たらとにかくやるだけ。スタートの合図を待った。しかし、ロケットスタートは不発。得意の逃げが決まらない。橋沼も工藤監督も「やばい」と思った。全員が横一線で、誰が勝つか全く予想できない。橋沼は後半、これまでにない粘りをみせたものの、横一線でゴール。工藤監督は天を仰いだ。「勝たせられなかったという思いと、これまでの橋沼にはないレース展開に頭が混乱した」とゴール直後の心境を振り返る。

橋沼が「優勝が目標と言いつつながら、表彰台にも立てないのか」と落ち込んでいたところ、3位のアナウンス。喜んだのもつかの間、悔しさがこみ上げてきた。

「日本代表に勝てなかった」。橋沼は高2時に急成長。日本代表候補合宿に招集、各種全国大会で決勝進出を果たすレベルになった。3年進級時の目標は代表入りし、世界と勝負すること。しかし、昨年5月の代表選考会では、悪条件のレー

スで結果が出せず、代表は夢と消えた。工藤監督と話し合った橋沼の新たな目標は「インターハイ、国体で代表選手に勝つこと」だった。

以 来、苦手な持久系トレーニングに率先して取り組んだ。かつての東京五輪のコーチ、深草喬雄さんの下を訪れ、教えを乞うた。約半年間、できることは全て取り組んだ。それでも、目標は達成できなかった。落ち込むのも無理はなかった。

しかし、工藤監督はマイナスに考えていない。「確かに目標は達成できなかった。これまで、悪条件では結果を残せず、自分の型でしか勝てなかった。今回は悪条件の中、後半粘って全てを出し切ったので入賞。間違いなく進化した」と分析する。

高 校卒業後はカヌーの名門、鹿屋体育大への進学が決まっている。今のままでは、大学や社会人で通用しないと考える橋沼は、現在、1人でメニューを考え、練習に取り組んでいる。世界で戦える選手になるためには、カヌーや私生活など、全てを客観視し、コントロールしていく力が必要だからだ。そのために、自分とカヌーに徹底的に向き合っている。

橋沼の武器は、爆発的なsprinter 力とまっすぐな性格。これに自己を管理する力が身に付けば、選手として無限の可能性が広がる。4年後、海の森水上競技場に立つことを目標に、一切妥協をせず、カヌーと向き合っていく。

Hashinuma Shin

1999年1月16日、中田町長崎生まれ。登米高普通科3年。小学時代、地域スポーツクラブの事業でカヌーと出会う。中田中進学後は海洋クラブに所属。全中など、各種全国大会に出場し頭角を現す。高校進学後、工藤監督と出会い、才能が開花。登米高カヌー部初のインターハイ、国体メダリストとなる。身長166cm。父、母、兄の4人家族。趣味は音楽鑑賞と読書。好きな歌手は「EXILE THE SECOND (エグザイルザセカンド)」。